

成果主義とのたたかい 第9回 四国ブロック

賃金は、労働力の再生産費(人間らしく働き続けられる生活費)

第五章 働くものの賃金論(前半)

司会 II 「人間らしく」とは何を意味しているのでしょうか、労働と労働力との違いとは、賃金の本質とは、いよいよ核心に迫っていきます。

K r r I 歴史的な意味合いを持つ賃金論に迫ります。

1. 賃金はどのように決まるのか

資本主義のしくみ

資本主義社会では、主要な生産手段は資本家が所有し、生産手段と労働力を買い入

れ、商品の生産を行い、投資した以上の価値が付加されていくことからもうけが生まれます。労働力を消費(労働)することで新しい価値が付加されたのです。

生産された商品は、交換されます。その交換を仲介するために、つまり社会の全商品が一つの商品で表現される特別な商品として生まれたのが貨幣です。

資本主義社会は価値法則によって支配されています。社会的分業のもとで、各資本家は商品を生産し、その商品を生産するのに必要な労働時間量によって価値がきまります。その価格は、需要と供給によって決

まり、その価格の変動によって、社会的に必要な生産が行われます。この時、社会的に必要な労働の分配も同時に行われます。

労働力と労働はどう違うのか

労働者は、生産手段を所有していないので、資本家に雇われて働くしか生活することができません。その際に労働者が賃金と引き換えに資本家に売るのは、ものをつくる肉体的、精神的な能力、つまり労働力です。労働者は人格上の自由のない奴隷のように身体そのものを売るのはありません。

ところが、労働者が賃金と引き換えに売

◆みんなの学習講座



労働力商品の価値は労働者の生存に必要な生活手段の価値で決まる

っているのは、労働力ではなく労働のよう
に見えます。資本家は、労働の対価として
賃金を支払う形をとっているため、労働者
が売るのは労働のように見えるのです。

労働力の価値はどのように決まるのか
労働者は、健康で人間的な生活をしてい
れば、おのずから労働する能力を体内にそ

なえることができます。したがって、労働
力商品の価値は、労働者が生きていくため
に必要な生活手段の価値によって決まりま
す。

〈労働者自身の維持費〉労働力を維持する
（再生産する）ためには、衣食住などの生
活手段が必要です。その範囲は、その国の
自然条件や社会的・文化的要素が含まれま
す。この場合、労働者階級がどのような習
慣と生活要求をもつようになってきている
か、ということが大きな要素となります。

〈家族の生活手段〉労働者は永久に働き続
けることはできません。次世代の労働者を
育てるためには家族の生活費が労働力の価
値に含まれていなければなりません。

〈育成費〉仕事に一定の技能が必要な場合
その技能を習得するためには一定の教育が
必要になります。したがって、労働力の価
値のなかには、育成費が含まれます。

賃金は労働力の価格

賃金は、労働力の価値を貨幣であらわし
たもの、すなわち労働力の価格です。現

実の賃金はかならずしも労働力の価値どお
りには支払われていません。資本主義社会
では、常に失業者がいて労働力は供給過剰
だからです。しかも労働者は、賃金なくし
ては生きていけないので、労働力を売らず
にしまっておくことはできません。

資本家のもうけ（剰余価値）は

どこから生まれるか

労働力の消費とは、労働者を働かせて、
商品をつくることです。ところが、労働力
という商品は独特の性質を持っています。
労働力という商品を消費し、その使用価値
を実現することにより、それ自体のもつ価
値以上の価値をつくりだします。

例えば、1日1万円の賃金を支払い8時
間の労働をさせます。労働者は、4時間働
けば賃金の1万円に当たる価値をつくりだ
し、残りの4時間分で1万円の価値をつく
りだしているとすると、資本家は、1万円
の賃金を支払いながら、2万円の価値を手
に入れたことになります。このただ取り分
の1万円を剰余価値といえます。

必要労働時間（4時間）	剰余労働時間（4時間）
労働者の賃金＝労働力の 価格（1万円）	資本家のもうけ（1万円）

※一日8時間労働、剰余価値率100%、賃金1万円/日の場合

資本家のもうけはどこから生れるか

可変資本と不変資本

ある工場で、5000万円が労働者の賃金として支払われました。前述の例でいうと、労働者のつくりだした価値は、1億円になります。このうち、賃金分の5000万円を超すものは剰余価値です。これは資本家のもうけとなります。労働者は自らの

賃金分だけでなく、資本家のもうけまでつくりだします。このように価値を増やす資本のことを可変資本といいます。

生産手段の価値は、商品に移転しますので、不変資本といえます。つまり労働者によってつくり出されたものが、資本家のふところに入ってもうけとなります。もうけの謎は、まさにここにあります。

資本家は剰余価値を

より大きくつくりだす

資本家が手に入れる剰余価値の大きさは、一人の労働者から搾り取る剰余価値の量に労働者の数をかけあわせたものです。だから、資本家は、一方では搾取される労働者の数を多くするために、資本を増やし生産の規模を大きくします。他方では、労働者一人ひとりから搾り取る剰余価値の量を大きくしようとします。

まず剰余価値率（搾取率）は、労働日のうち労働力の価値を生産するために必要な労働時間部分と、資本家のために遂行される剰余労働時間とのあいだの比率、そして

搾取とは、他人の労働または労働の成果・生産物を無償で手に入れることです。

剰余価値の生産には大きく分けて3種類あります。まず一つ目は「絶対的剰余価値」で、労働日の延長によって生産される剰余価値です。二つ目は「相対的剰余価値」です。労働の生産力の増大によるもので、必要労働時間の短縮、およびそれに応じて労働日の量的比率が変化することから生ずる剰余価値のことです。この場合は労働者の生活費が安くなり、商品の価値も社会的に下がります。つまり労働力の価値が下がるということです。また、さらに相対的剰余価値生産の個別・特殊な方法として、労働の強度の増大があります。労働時間が不変の場合、労働強度の上昇は必要労働時間を短くし、その分、剰余労働時間が長くなる。労働力の価値は変わらないが、結果として剰余価値量（率）は増え、労働時間を延長したのと同じ結果をもたらします。

最後に三つ目は「特別剰余価値」です。社会的標準よりも優れた生産諸条件、より

◆みんなの学習講座

高い労働の生産力を用いて生産した資本家の商品の個別的価値は、社会的価値よりも低い、その商品を社会的価値で売ることによって、その差額を儲けとして手に入れる。これが特別剰余価値であり、資本家はこれを求めて激しい競争を繰り返しているのです。

搾取をかくす賃金形態

なぜ賃金は労働力の価格なのに、労働の価格という外観をとるのでしょうか。

第1に、働いて賃金を得るという経験からは、労働の価格ということはなにひとつ不思議に思われなからず。

第2に、労働者は労働したあとで賃金の支払いをうけるからです。

第3に、労働力は労働者の体から切り離せませんから、労働者が資本家に実際にひき渡すのは、労働力ではなくて、その機能である労働というように思いこまれやすいからです。

このような外観が、もつともらしくみえる作用をより強めるのが賃金形態です。そ

の基本形態は、時間賃金と出来高賃金です。この二つの賃金形態を基本にして、職務給・職能給が導入され、現在の成果主義賃金へと変化してきました。賃金は労働の報酬だというみせかけをますます強め、労働者同士を競争にかりたてて団結を乱しています。

2. 低下してきた賃金

1997年から2012年までの

賃金低下状況

12年の勤労者の平均賃金は、90年以降で最低となり、ピーク時の97年より年収で約60万円も減っています。非正規雇用が、労働者の3人に1人、若者と女性では2人に1人にまで広がり、年収200万円以下の労働者が1000万人を超えています。

こうした状況の拡大により、正規雇用の労働者賃金と労働条件の低下、長時間労働に拍車をかけています。

大企業の経常利益 内部留保は増え

賃金は減少

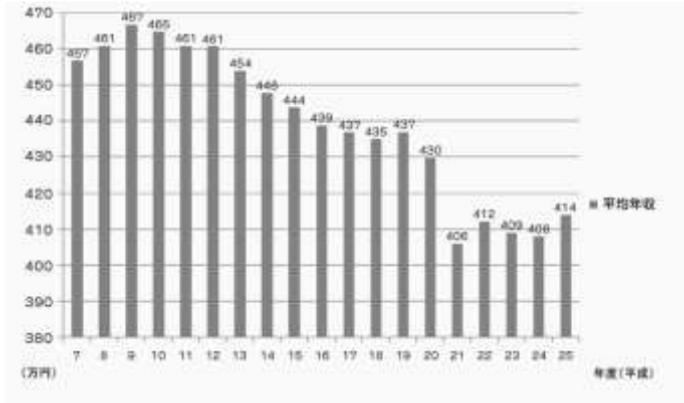
日本企業全体の経常利益は、97年度比で、11年度には1・6倍に増えています。働く人の所得は9割以下に減少しました。

資本金が10億円以上の企業については、経常利益は大幅に増えており、06、07年には戦後最大の規模に達しています。内部留保が前年度比で5兆円増の272兆円に達し、大企業が内部留保を着実に積み増しています。これに対して、民間企業労働者の年間平均賃金は、ピーク時から約60万円も減っています。

労働力商品の特殊性

司会さん、ここでの問題は価値についてです。労働者が労働力を用いて生産するところで初めて新しい価値が生まれるのです。ここが資本主義のポイントです。労働力の価値以上の価値を生み出すのです。

HIIこのテキストでは、資本家と労働者という関係上の価値法則しか書かれていませ



低下し続ける労働者の賃金

んが、本来は資本主義社会のなかで価値法則はあらゆる面で作用していますね。司会Ⅱそうですね。次に、労働と労働力の違いについて書かれています。労働者は労働力を売っているのであって労働を売って

いるのではないと。しかし、現実には労働に対して賃金が支払われているように見えま

すね。
KrⅠ賃金形態には二つの基本的な型があります。それは時間制賃金と出来高制賃金です。しかしどちらも、労働をした後に支払うという後払いの賃金制度になっているために、どうしても労働に対して支払われているという風に見えるのです。なおかつ後者の出来高賃金になれば、一人ひとりの労働者に差を付ける成果主義賃金制度が入りやすく、より搾取が強化され、かつわかりづらくなるのです。

HⅡ最終的に成果主義賃金につなげるために、まずは労働力に対して賃金が支払われているということですね。つまり搾取をしていることを後払い賃金により隠しながら、かつ労働に対して支払われているように偽装し、成果主義賃金に移行しやすい労働者の意識づけを巧妙に行っています。

TaⅠ普段働いていると、どうしても結果を出さないといかんと思ってしまうし、競争に流されてしまいます。

賃金は労働者の生活費

司会Ⅱ労働力の再生産費というのは、労働者の維持費、家族の生活費、育成費の3つです。大学を出ていても、非正規や時給制賃金で短期雇用の労働者が増えているということですし、正規雇用でもワーキングプアの状態に置かれている状況です。

IⅡ家族の生活費というのは、当然労働者は自分だけでなく、結婚したら夫婦で生活ができなくてはならないということですが。しかし現在は女性の活躍の場を、と声高に政府が主張していますが、男女平等を逆手にとつて女性を労働者として安く使おうというのが狙いです。

MaⅠ赤手帳づけなどを用いた生活給を算出する時に、標準労働者世帯を基本として、その無職の妻、子ども2人という計4人の生活費等を算出していくのが標準とされてきました。

MⅡ男女平等の点から女性の社会進出の拡大もありますが、夫一人の収入では生活が成り立たなくなつたために、共働きが増えたのも事実です。この前も子どもを家に残

◆みんなの学習講座



して仕事に出ている母親が、家に帰ると火事で子どもが亡くなったという事件がありました。社会的に子どもを見てくれる環境が十分でなければこんな不幸な事件が起こるのです。

Ta II単純に政策として女性を労働力として活用したいということですね。でも社会全体でその制度を支えるための基盤が伴っていないことが問題ということですね。

H II同じ場所で仕事をしている夫婦なら要求すべき生活給はシンプルに要求額を算出できますが、だいたい別々の職場で夫婦は仕事をしているわけですから、子どもも含めたその家庭の生活費を二人で分けて要求していくことは困難です。要求した生活給が満額得られるならそうしてでもきちんと

した額を出しますが、標準的な生活給を要求していくことがまず必要ですから、やはり、夫の側も妻の側もそれぞれ自身を中心として配偶者と子ども、全て含めた生活給を算出し、それぞれ要求すべきではないですかね。

社会保障の充実も大切

Ta II労働者は、生きるために仕事をしなければなりません。そのためには子どもを預けなければならぬ、預ける施設が足りない、でも預けるためにはお金がいる。堂々巡りのような感じですね。

H II老後の生活も賃金で保障してくれないと厳しいですよ。

Ta II寿命が延びた分だけ増やしてもらわないといけないですね。それだけ生活に費用がかかるのですから。

H IIむしろ労働時間だけ増やされていますね。70歳超えても必要な生活費は働いて自分で稼げと言わんばかりに。本来保障すべき労働期間内に支払わずに、薄給で長い期間働かせた方が全体として搾取量が多い

ですからね。

搾取の本質

Kr II資本家の儲け、剰余価値はどこから生まれるかですが、資本家側からは生産手段から価値が生まれるとしています。利潤率という考え方はこの生産手段である不変資本も含んだ計算になるからで、本来この不変資本は摩耗部分があるにしても、価値が移転するだけなのです。その不変資本を活用し、労働力という可変資本を投入することによって初めて新しい価値が生まれるのです。労働者が労働することによって、つまり労働力にはその価値以上の価値を生み出す性質があるため、必要労働時間の価値どおり賃金が支払われたとしても、剰余労働つまり剰余価値という資本側の儲けを生み出している、ということです。

司会 II近年はこの搾取を見えづらくした働き方、賃金体系で、かつ競争と分断を煽る出来高制賃金が増えてきているのです。本質的な問題の討論が続きますが、次回に期待しましょう。